

Stifter の作品「Witiko」における Witiko 像

本 岡 五 男

Stifter は、「Feldblumen」を集め、「Studien」を重ね、「Bunte Steine」を並べて、それらの特殊の中に遍在する普遍の法則を見出そうとする。1852年、「Bunte Steine」の出版に際し、序文をつけてその中で、das sanfte Gesetz を打ち出すのである。das sanfte Gesetz は、自然においては、「風のそよぎ、水のせせらぎ、作物の成長、海のうねり、大地の緑なすさま、空の輝き、星のきらめき」の中に「世界を維持する法則 (das welt-erhaltende Gesetz)」として現われ、人間界にあっては、「正義、素朴、克己、分別、分相応の活動、美の讃嘆にみち、晴れやかに悠然と死んで行く生活」、及び相互の愛と尊敬の中に、「人類を維持する法則 (das menscherhaltende Gesetz)」としての、「正義の法則 (das Gesetz der Gerechtigkeit)」、「道徳律 (das Gesetz der Sitte)」として働いていると言う。1845年夏上部オーストリアを旅行して中世の Rosenberg 家の足跡にふれて「Witiko」制作に着想し、1848年の革命に際会して決然その製作を志し、膨大な資料を集め構想をねる間、Stifter の方向を常に規定していたのがこの das sanfte Gesetz であったことは言うまでもない。「Bunte Steine」の序文は、Hebel への反論の意味もあるが、それよりも、Stifter がその時までの創作原理を帰納し、今後それを演繹して行く一種の宣言と見ることが出来る。とすれば、「Bunte Steine」の序文は、同時に又「Witiko」の序文とも見ることが出来るのである。「Bunte Steine」と「Der Nachsommer」が「Witiko」に先立って世に出たのは、膨大な資料を駆使した990頁に及ぶ歴史小説の完成に20年の歳月を要したからに他ならない。

Stifter の理念は常に das sanfte Gesetz にあったとはいえ、1848年の革命、それに続く騒乱は、

Stifter の目を大きく転回させる。Stifter にとっては問題はもはや自然や個人にあるのではなく、政治問題に、人類全体の問題にある。Stifter は新聞に寄稿して政治問題を論じ、又、Gustav Heckenast にあてて、「すべての人の気持から、又、私自身の気持からして、文学は、現在、人の心を引きつけようと思うならば、3月革命以前とはすっかり違ったモチーフを扱わねばならぬ、と言うことがはっきりしましたので、私は、今日と同じように途方もなく無法な時代であったオットカール時代の歴史小説にすっかり没頭しました。私は激しい政治感情を抱いているさ中にその時代の研究にたずさわることが出来たのですが、それと同じく、戦争や革命のさ中においてもその時代のものは読まれることでしょう。」(8. September 1848) と書簡を送っている。Stifter は、12世紀のボヘミヤの領主継承戦争の舞台を実地に調べる為に Nürnberg を訪れ、Prag を訪ね、Rosenberg 家の史料を集めて行くにつれ、1848年の騒乱と当時の騒乱との相似を痛切に感じる。そして、過去の歴史的事実は、今や巨大な存在として Stifter を圧して来る。「Hochwald では、私は軽率な若者でしたから、歴史を大急ぎで片づけて空想の引き出しの中にほうり込んでしまったのです。今ではあのような子供っぽい振舞が恥しいぐらいです。今や歴史は畏敬の念を感じさせる岩のように私の眼前に突っ立っています。そして現在ではもはや、この岩をどう扱うかが問題なのではなくて、この岩は何であるかが問題なのです。」(7. März 1860, Heckenast 宛書簡) と書く。かくて Stifter は、畏敬の念を感じさせる歴史そのものの本質把握に向い、「Witiko」制作の基本的態度を決定する。「民族は、創造主の手から自然に大規模に作り出されたように見えます。この民族

の運命の中には、私たちが道徳律と呼んでいる巨大な法則が展開しています。そして、民族の転変はこの法則が形を変えて現われたものであります。この事実には何か神秘的な異常さがあります。ですから、私には、歴史小説では歴史が主要事であって、個々の人間は副次的なものと思われるのです。個々の人間は大きな流れに運ばれながら、流れの形成にあずかっているのです。」(8. Juni 1861, Heckenast 宛書簡) Stifter は結局、歴史の流れの中に das sanfte Gesetz の支配を見、それを「Witiko」で描こうとしたと言うことが出来よう。そうだとしたら、副次的な意味しか与えられていない1個人 Witiko は、一体どんな人間像をそなえ、どんな役割を演じているのでしょうか。副次的とは言え、歴史の形成にあずかるのは、やはり人間である。形成にあずかる人間と、形成されて行く歴史とは密接不離である筈である。Stifter が造型して行く人物像は、主要事たる歴史そのものを反映していなければならない。

Stifter は「Witiko」の制作にあたり、極度に感情を抑えて、歴史の流れそのものの叙述に主観をはさまないよう努める。1805年に生れた Stifter が Joseph Axmann に手紙を出した1861年では、Stifter は、「世界観がはっきりしていて、自分の感情や他人の言葉に引きずられて物事を違った色で見たりしない」初老の年令であった。「Witiko」と共に制作を進めた「Die Mappe meines Urgroßvaters」においても、又、「Der Nachsommer」においても、das sanfte Gesetz に反するものとして激情を斥けたが、「Witiko」制作に際しても、最も危険なものは「誤ったパトス (ein falsches Pathos)」(同上書簡)であるとした。歴史を客観的に叙述しようとする時、Stifter は Witiko の主観も抑えて行く。我々は Witiko の見たままを Witiko の目を通して見、Witiko の耳を通して聞くのみである。たとえば Sobjeslaw の後継者を選ぶ Wyscherad の会議だが、Witiko は全くのオブザーバーとして臨席を許されるにすぎず、一片の所感も披瀝するわけには行かない立場に置かれている。又、Witiko の心の動きを何1つ知ることもなく我々は、Witiko の耳を通して諸侯や僧正たちの、Insel 版全集で50頁

に近い発言の羅列を聞くのである。又、Sobjeslaw の臨終の場に居合わせた Witiko の目を通じて我々は Sobjeslaw の最後の状況を見るのである。「2月14日には侯はもう物を言わなかった。カーテンのかかってない窓から、侯の一族の多くが住んでいる東の方を見た。そして、午後の日ざしが西に傾いた時、熊の毛皮の掛ぶとんを両手でまぎうって手を組もうとした。司教が銀の十字架を渡すと、しっかりと両手で握った。部屋は次第に人で一杯になって行った。医者が侯を見守った。牧師たちは低い声でお祈りをあげた。そして、まだ日のある中に侯は2,3度深い息づかいをして、まぶたを閉じた。そして顔の表情が動かなくなった。」(全集第5巻, Witiko, S. 158~159) 何と言う感情のない冷静な観察であることか。Stifter は、このように常に冷静な観察者 Witiko を殆んどすべての場面に登場させ、歴史そのものの流れを客観的に展開して行こうとするのである。従って、Witiko の役割の一つは、作品構成上の役割であって、物語の筋の担い手である。正義感に溢れて私利私欲のない、冷静な者の目は、ありのままに物事を見ることが出来るわけである。

しかし、Witiko にはもう1つ役割が課されている。歴史の流れの形成にあずかる役である。Witiko は歴史的な背景の下に冒険をしたり、恋愛したり、あるいは歴史の流れを変えたりする主人公ではない。たくさんの星の中であって、自分なりの光を放ちながら、宇宙の法則に従って軌道を廻っている星の1つのように、たくさんの登場人物の中の主要な代表者の1人でしかない。その為に Witiko の個性が特に特徴ずけて描かれているわけでもなく、又、写實的に活写されているわけでもない。Witiko の外部の輪郭は極めておぼろげである。Witiko は常に皮の騎士装束に身を固め、まぶかい皮の頭布をかぶっているの、外からその顔立ちを確かめるわけにはゆかない。Bertha との初めての出会いの際 Bertha の好奇心に応じて頭布を脱いだ時、及び、Bertha に求婚の際頭布を脱いだ時にのみ僅かに窺えるだけである。「ブロンドの巻毛、あおい目、ふっくらした頬、金色に輝く頬ひげ」、Witiko の顔立ちについて Stifter はこれ以上一言の記述もしない。

個々の人間が歴史の形成にあずかるのは、もとよりその内面生活、生活態度によってであるからである。Witiko の内面生活は、「Der Nachsommer」の Heinrich と違って、若くしてすでに完成の域に達している。Heinrich では、学問、芸術、生活のあらゆる面での成長の段階が示されているが、Witiko ではすでに出来上った人物として登場して来る。Witiko の伯母は、「Benno 神父さんが Witiko の為に来るだけのことをして下さったのです。神父さんは神様への畏敬の念、美しい言葉、よいしつけ、学問、生き方、過去の出来事を Witiko の心に植えつけて下さったのです。そして、又、武器の使い方、馬の乗り方、泳ぎ方、走り方、その他いろいろの技倆を学ぶことの出来るようお導き下さったのです。」(全集第5巻、Witiko S. 729~730) と言っている。又、Heinrich にははっきりした目標がないのに反し、Witiko には、「正しい人にふさわしい大きな運命を求めて、出来るだけのことをしたい」(同上、S. 28) という目的意識がある。「Witiko」では個人の成長は問題にされない。Stifter は、歴史の流れの形成にあずかる人間像の形成にもっぱら力を注いで行く。Witiko の内面生活は安定していて、常に沈着、冷静、そして節度があり、合理的であって、それらの面が繰返し描かれる。たとえば Witiko の馬の扱い方である。水やかいばに対するこまかい配慮、遠乗りの後で体が冷えないようにマントをかけてやる愛情、馬に関する専門家的な知識、そして、早く走らせねばならぬ時の為にふだんは決して急がせない合理性。こう言った注意深い扱い方によって、Sobjeslaw の居城から Wyschehrad の会議へ急使に立つことも出来るし、Wysoka 山ですばやく戦線の間隙をふさぐことも可能となるのである。Witiko はいかなる時も理性的な判断に立って、感情に走ることがない。Bertha に求婚する時ですら Witiko はいつものように冷静である。Witiko はしかし謙虚である。この謙虚さは、神に対する畏敬の念から抱く人間卑劣の感情と言うよりは、むしろ、自分も森の住民の1人にすぎないとする意識から出ている。Witiko は、故郷に帰れば故郷の人々の服装で全くその一員として振舞い、人々の相談にの

り、人々に援助を惜しまない。戦いに赴いては部下と同列の意識で行動する。「私は、森では部下を持つとは思わない。幸運に恵まれれば森に住み、森で働き、森の仕事をしよう。」(全集第5巻、Witiko S. 599) と言う。だから聖トーマスの山上に居城を立てても、「Burg」とは決して言わずに「Haus」と言う。Witiko が「Burg」と言う表現を使うのは、止むを得ぬ必要から、Bertha の父 Heinrich von Jugelbach の前で Bertha に求婚する時だけである。Witiko が森の人たちの指導者に選ばれたのは、Rowno の言うように、Witiko が「人を搾取る大きな力と大きな栄光を持たぬ者の味方であり、額に汗してパンを得ている民衆の味方である」(同上、S. 268) からである。謙虚さは民主的な言行につながり、民主的な言行は社会的正義感につながる。Wladislaw 侯の判断では、正義とは、支配欲、私利私欲の為の戦争を防止して秩序を維持し、民衆の福利、安全、自由を守ることである。Wladislaw 侯は、正義を守る為には非勢を顧みない。「不正による連合は、そのつながりがどれ程強く見えようと弱いものだ。……だが正義による連合は、そのつながりがどれ程弱く見えようと強力だ。神がきずなを結ばれたのであるし、正義を見捨てることを誰でも恐れるからだ。」(同上、S. 139) という信念を持っているからである。Witiko が、Sobjeslaw に受けた恩義にも拘らず、私利私欲の野心家 Natscherat にかつぎ出された Sobjeslaw の息子 Wladislaw に対し、「私は自分の義務と思ったことに忠実だった。今や、どこに正義と善があるかがよく判った。……永遠に君から離れることを宣言し、今からウラデイスラウ侯を助けて臣下になる。」(同上、S. 266) と叫んで Wladislaw 侯の側に立ったのは Witiko の正義感によるのである。Witiko が Wladislaw 侯によって森林地帯の領主に封ぜられや、Witiko の治世は、正義の擁護者 Wladislaw 侯の治世の小規模な形で行われるのも当然である。施政にあたって Witiko は云う、「森の仲間が森の同僚に対するように、善良な人には私は親切にしよう。あやまちを犯すものは矯正に努めよう。そして罰する必要がある時は、罪が明らかになれば、寛大に、だが、確實

に罰しよう。援助の必要な者は来るがよい。私は力の限り援助しよう。私の家の門は、家臣の誰一人として締め出されることのないよう開け放しておこう。」(同上, S. 743) と。

こう言う風に Witiko の立居振舞を見て来ると、我々の眼前に浮ぶ Witiko 像は過不足なくまとまった姿である。Witiko の心の中には不安の影がなく、物事を処するに沈着、判断には冷静、風格は素朴、そして正義に基づいているとの確信から物におじることを知らない。人に接しては、各個人の人格を尊重して真情を以て当り、尊敬され親しまれる。Witiko なる人物は、まさに das sanfte Gesetz を具現した人物である。Witiko には若さや陽気さがなく、Witiko は笑い声をあげたことのない真面目一方の騎士のように見えるけれども。Franz Hüller が、この Witiko 像をさして、「静かな偉大さと中世的な素朴さのある古典的な芸術作品 (ein klassisches Kunstwerk von stiller Größe und mittelalterlicher Einfachheit)」(Adalbert Stifter's "Witiko" S. 70) と言っているのはけだし至言である。激情を峻拒された Witiko には、若人らしい熱い血が流れていない。

Witiko と Bertha の関係は、ちょうど「Der Nachsommer」の Heinrich と Natalie の関係と同じく、2人が das sanfte Gesetz に則って同じ平面に立った時、婚約が成立するのである。「正しい人にふさわしい大きな運命」を求めて旅立った Witiko は、Plan の近くの Kreuzberg で、偶然、野ばらを髪にさした娘に出会う。この娘はこのあたりの領主 Heinrich von Jugelbach の娘で Bertha と言う。野ばらは Witiko の先祖がかってイタリアから移植したもので、Witiko には娘のさしている野ばらが吉兆のように思われる。そして、Witiko は Bertha が忘れられなくなる。2年後、Olmütz の Zdik 僧正の避難を助けて Passau へ赴く途中 Heinrich von Jugelbach の居城に立寄る。Witiko は、身の危険をもとのとせずに Wyschehrad の会議に臨席した時の堂々たる態度、Wysoka 山の戦いで得た大きな戦功にもかかわらず、未だ正しい人にふさわしい「大きな運命」を得ていないとして、求婚をは

ばかっている。所が、Bertha の方は、世俗的な意味での偉人を自分の夫にしようと夢見ている。「家を建てなさい、ヴィティコ。そしてその時でも何の汚れもなければ、私はあなたに従って死ぬまでおそばにおります。その時にはあなたの国の人たちに語りかけて、その人たちを偉大にしないさい。そしてあなた自身も偉大なことをして下さい。」(全集第5巻, Witiko S. 466) と言う。Bertha と次元の違う Witiko は、初めての出会いの時の言葉、「出来るだけのことをしたい」を謙虚に繰返すしかない。しかし、Bertha の少女的な夢想は変らない。「下の森の木々が高くそびえていようと、穂で金色になった畑やビロードのような青い草原が遙か遠くまで広がっていようと、目の届くかぎり、あなたにかなう者がないようにして下さい。」と言う。「私は最高のものに達するよう努力しよう (Ich will zu dem Höchsten streben.)」(同上, S. 466) と Witiko は答えるが、Bertha には Witiko の真意がまだ判らない。Witiko は「zu dem Höchsten」と云って「nach dem Höchsten」とは言わないのである。「zu dem Höchsten」なる言葉は、最高のものへの途上にあることを意味している。Witiko は、Bertha の少女っぽい夢の実現よりはむしろ、Bertha の内面の変容を期待している。Witiko の母親 Wentila も Witiko と同じ精神世界にあり、Witiko を支持し、Witiko を勇気づける。「遙大な気持を持って目標に達しようとしてはいけない。金色の穂の畑や木々の梢のそびえた森でお前になう者がなくなってしまうと、おまえがシルヴェスターの考えを伝えてくれたように、とるに足らぬことでも正しいことならそれをする恩寵がお前に与えられさえしたら、それが一番いいことでしょう。」(同上, S. 549) と言い、又、Bertha の父、世俗的な勢力家 Heinrich von Jugelbach の婚約許可の条件——Witiko が Wysoka の山の戦いで旗印とした白い盾の上の野ばらが居城の上に輝き、一国の運命の中へ花開くこと——に対して、「運命と言うものは変わるものです。種族は豊かになるかと思えば貧しくなり、又、豊かになれるのです。」(同上, S. 548) と言う。Bertha が Witiko や Wentila の精神

世界に達した時、婚約が成立するのである。やがて Witiko は Mähren へ出征し、戦功により森林地帯の領主に封ぜられる。白い盾の上の深紅の五枚花びらの野ばらは、今や一国の運命の中へ花開いたわけである。聖トーマス山の峯には Witiko の居城がそびえる。婚約の条件がすべて果されたと思った Witiko は、Bertha の住む Bayern へ向う。この間に Stifter は Bertha を成長させ、Witiko の精神世界の中へ引き入れている。Bertha の内面生活が何を契機にして変容をとげたのか、又、どんな思考過程を経たのか、Stifter は一行の説明も加えない。Witiko と Bertha の人生観をとり上げてその変容を描き、あるいは、個人の心理を分析して行くことは、今の Stifter の意図ではない。Stifter は 2 人を das sanfte Gesetz の上に乗せ、その結果を記述して行くだけである。2 人の婚約がいかに das sanfte Gesetz に則ったものであるか、2 人のかわす会話に耳を傾けよう。

「2 年前に君は、森のはずれの美しい大きな石のそばで僕にこう言った。家を建てなさい、ヴィティコ。そしてその時でもまだ何の汚れもなかったら、私はあなたに従い、死ぬまであなたのそばにいます、とね。とうとう僕は家を建てた。そして、僕に汚れがあるかどうか君に尋ねようと思って来たのだ。」

「あなたには汚れはないわ、ヴィティコ」とベルタは答えた。

「それじゃ君は僕の家について来るね。」ヴィティコは尋ねた。

「私はあなたの家について行きます。」ベルタは答えた。

「そして、死ぬまで僕の家にいるね。」ヴィティコは尋ねた。

「死ぬまでいます。」ベルタは答えた。

.....

「ベルタ」とヴィティコは言った。「君はこう言った。下の森の木々が高くそびえていようと、穂で金色になった畑やピロードのような青い草原が遙か遠くまで広がっていようと、目の届くかぎり、僕にかなう者がなくなってしまう、とね。ところが僕と同じぐらいな人は

たくさんいるし、僕以上の人だってずいぶんたくさんいるんだ。ベルタ、君は僕を尊敬して行けるだろうか。」

「ヴィティコ、」とベルタは答えた。「私がああ言った時、僕は最高のものへと努力しよう、っておっしゃったわ。」

「あの時も今もそのつもりだ。」とヴィティコは言った。「そして、自分の出来るだけのことをしたい、とも言った。」

「所が、努力が第一歩よ。」とベルタは言った。「そして、その第一歩をあなたは踏み出しておられる。……だから私はもう、あなたにかなう者がなくなってしまうのはいいなんて言えません。でも何年かたったらそうなるでしょう。そして、いつか、ヴィティコ、あなたにかなう者はもう誰もいない、と言うことでしょう。」

「何年か経って、又、何年か経つだろう。そして君はそう言えないかも知れない。」とヴィティコは答えた。

「そうだったらもっと待ちます。」とベルタは言った。

「そして待ち続けるんだったら？」とヴィティコは言った。

「あなたがその途上にあることは判っています。」とベルタは答えた。(同上, S. 762~763) das sanfte Gesetz に基づいて結ばれた Witiko と Bertha からは、やがて、「白い盾の上の深紅の五枚花びらの野ばら」の後裔が、ちょうど野ばらが野に繁茂して行くように、たくましく育って行く。Witiko と Bertha の関係は、das sanfte Gesetz になかった結婚は種族の繁栄を約束されることがこの 1 つの例示である。

Witiko 像は、全く、das sanfte Gesetz の上に立っている。逆に言えば、das sanfte Gesetz は全く、Witiko によって体现されている。しかし、1 つだけ Witiko の恣意と思われる行動がある。これまでに見て来た Witiko 像と矛盾するように思われるこの点を、我々は検討しておかねばならない。Witiko の指揮する一隊が反乱軍の守る Prag へ向う途中、Hollaubkan で反乱軍の中心人物、Sobjeslaw の息子 Wladislaw 及びその側近、Brünn の領主 Wratislaw、Olmütz の領主

Otto などの率いる小部隊と出会う。彼らは15倍の兵力を持つ Witiko の部隊が襲えば、一挙に彼らを殺し、あるいは捕虜にすることが確実に出来る所であった。しかし Witiko は、とっさの判断で彼らに退路を開いてやり、難なく逃亡させてやるのである。Witiko がこう言う処置をとったのは2つの理由からである。1つは、反乱軍に Wladislaw 侯の軍勢の圧倒的な優勢を見せつけ、逃亡させてやることによってこのことを Prag の反乱軍に伝えさせ、反乱軍がそれによって戦意を喪失すれば、これ以上の流血が避けられるだろう、と言うこと、他の1つは、後に Znaim の陣営で Witiko が告白したことだが、Wladislaw 侯が同族相食んで甥の血を流させたと言う非難を後世に受けるかも知れないし、又、捕虜にした場合にも Wladislaw 侯は 反逆者たちを 罰せねばならないから、後に禍根が残る、もっと悪い事態が起るかも知れない、と言う将来に対する配慮であった。なる程 Prag での戦いは Witiko のこの行為によって避けることが出来たのであるが、しかし、もし反逆者たちが Witiko の手で捕えられていたら、Holoubkan の村は焼かれなくてすんだであろうし、その後の Mähren の諸侯との戦いも全然起らなかったであろう。常に冷静、沈着、そして節度をわきまえている Witiko が、どうしてこんな結果を招く措置をとったのであろうか。すでに知っている Witiko 像には不似合なことではないか。Stifter は、我々の抱いている Witiko 像を歪めるような、このような挿話をなぜさしはさんだのであろうか。Franz Hüller は、「この挿話はシュティフターの全くの創作である。」(Adalbert Stifters "Witiko", S. 36) と言い、「シュティフターは、この小説全体の中心点である法と道德の概念を戦争にも適用し、明確にしようとしたのである。彼は、不動の規範、杓子定規な規律、慣習的な規則たる軍律と、理性と感情、悟性と心情とが関わっている道德的な規律との間に区別をつけようとしたのだ。」(同上, S. 37) としているがどうであろうか。思うに、Stifter にとっては歴史全体の流れが問題であって、その一こまである個々の戦争は大きな歴史の流れの中に飲み込まれてしまう、と言う立場を Stifter はとっ

ているのではないだろうか。大きな視野から見れば、Witiko の恣意的な独断も、将来への顧慮から出ている以上、許されること、いや、むしろ妥当なこととしているのではないだろうか。爾後の Witiko の態度がこの解釈を裏づけているように思うのである。軍律に背いた Witiko は許可あるまで Wladislaw 侯のもとに出入りするのを禁じられるが、Witiko と同じ精神世界にある侯に理解されて、以後2人は心の友となるのである。又 Silvester 僧正から、「お前が何をしたか私は知っている。そしてお前のしたことは良くないと思う。お前は侯に対して軍人としての義務があったのだから、戦いそのものをやりさえすればよかったのだ。」(全集第5巻, Witiko S. 450) と言われても、Witiko の心には動揺も不安も葛藤も起らないのである。少くとも、Stifter は Witiko の心理状態には一言もふれていない。ただ、枢機卿との対話によって、Witiko が良心にやましさを感じていないことが示されるのである。

「お前が事物の要求するものを行おうと努力しているのなら、誰も彼もが事物が何を要求しているかを知ってそれを行なうなら、良いのだが。そうすれば神の意志を行っているのだから。」

「事物が何を要求しているか判らないことがよくあるのです。」と Witiko は言った。

「その時には良心に従うがよい、そうすればお前は事物に従っているのだ。」と枢機卿は言った。(同上, S. 816)

枢機卿の言葉では、Witiko は良心に従って行動したのであり、「神の意志」を行ったわけである。

Hüller の解釈に従うにせよ、従わないにせよ、歴史の流れの形成にあずかる人間としての Witiko は、やはり das sanfte Gesetz の体現者であることには変りはない。

所で、Witiko は一体ドイツ人であるのかどうか。Stifter は種々の年代記を読んでも、Witiko と呼ぶべきか、Vitigo と呼ぶべきか、あるいは Witigo, Vitko, Witico, Vitek と呼ぶべきか、なかなか決めかねたらしい。(7. März 1860, Gustav Heckenast 宛書簡) Hüller によれば, Palazky は Witigonen はボヘミヤの出であるとし、

他の研究家はバイエルンの出で Passau 司教区に
関係が深い、と Flöring が報告している、そう
である。(Plazky は Stifter も尋ねようと思っ
ていた歴史家であるが、Flöring に関しては不
詳) しかし、Stifter はこの作品では、Witiko 一
族はローマの一種族の出であり、Heinrich IV
の娘 Agnes に侍して、後にボヘミヤのある領主
と結婚した一祖先の長女が Witiko の母親である
としている。従って、Witiko はボヘミヤで生れ
たことになる。服装から判断して、Hüller は、
白い羽をさした頭布、皮帯か綱で結えたゆったり
した上っ張り、わら屋根の恰好に下げた髪の毛な
どからして、Witiko はチェッコ系であると言う。
しかし、Stifter は Witiko の国籍など問題にせ
ず、無意識にドイツ人としたようである。Stifter
としては、Witiko が das sanfte Gesetz を体現
している人物でありさえすればそれでよかったの
であろう。

こう言うふうに見て来ると、Witiko なる人物
は、ボヘミヤの領主継承戦争時代に実在した 1 人
物に外形をかりて、正義と道徳を両岸として流れ
て行く歴史の流れの形成に最もふさわしいように
中味を満たされた人間と言うことになる。Wi-
tiko は、「Bunte Steine」の序文にある、「正
義、素朴、克己、分別、分相応の活動」にみちた
生活を送り、「正義の法則、道徳の法則、この法
則に従えば、各人は尊重され尊敬され、安全に他
の人と共存し、もっと高い人間的な人生行路を歩
むことが出来、同胞の愛と賞讃を得、人間は誰し
も他のすべての人にとって宝物たる存在である
が、宝物として見まもられる、」と言う Stifter
のイデー通りに、das sanfte Gesetz そのままに
生きている存在である。客観的に歴史を描こうと
して極力主観を抑えた Stifter であったが、結局
作り上げられた Witiko 像はきわめて主観的な姿
を示していると言わざるを得ない。歴史の形成に
あずかって力ある者たち、Wladislaw 侯、Benno
神父、Silvester 僧正、Wentila などが、いずれ
も Witiko の類型を示しているのもこの傾向の赴
く所であろう。Witiko が若々しさのない若者で
あるのも、激情が das sanfte Gesetz に反して
いることからして、むしろ当然と言わねばならな

いであろう。そして結局、Witiko 像全体は、
Stifter が全篇にみなぎらそうと努めた中世的雰
囲気にすっかり溶けこんではいるものの、生気の
乏しい、淡い影しか持たぬ姿としてしか浮んで来
ないのである。だが、自然界の「嵐」や「噴火」
に比すべき戦争の背後に、「作物の成長」や「大
地の緑なすさま」の如く、正義の法則、道徳律
の下にある民衆の静かな生成発展のさまを見て、
これを歴史の流れそのものとして、その描出に
Stifter が「心血をそそいだ」(18. November
1864, Heckenast 宛書簡) ことからすれば、これ
また止むを得ないことであろう。

だが、歴史の流れそのものの描出に際しても、
Stifter はまた、「現実を尊重しようとする意志は
あると言えますが、我々現代人の場合には、いつ
も自我がその一部を現実の中にまぜこみ、そして
その自我の一部を現実と呼んでいるのです。」(7.
März, Heckenast 宛書簡) と言っているように、
歴史的事実にも主観を入れて行かざるを得ない。
民衆の生成発展の相を描こうとする Stifter は、
「書かれない歴史も含めて、世界史は全体として
見れば、最も芸術的な叙事詩であります。その部
分が文学と見なされ、素朴に取り出され、その時
代に生きた人々の口から物語られれば、一番すば
らしいのです。」(7. März 1860, Heckenast 宛
書簡) とするけれども、単なる年代記を以て歴史
とすることは出来ない。Stifter は、歴史の一
部分を取り出しながら回顧の姿勢をとらず、むしろ、
歴史の中にある永遠の相をとり出して、今後の
人心の活力に資しようとするのである。Stifter
は、ちょうど Witiko なる人物におけると同じ
く、中世におけるボヘミヤ継承戦争に形をかり
て、その中に das sanfte Gesetz をもり込み、
現在及び未来のあるべき人間社会を描いたと言え
るのである。「Witiko」の中において、「人類に
あっては、人間は人間を、隣人は隣人を、友人は
友人を助けるようになっている。家の焼けた人
には、その周りにいる人々が援助する。人々がも
はや孤立せず、人間どうし、隣人どうし、友人ど
うしと言う時代が訪れるであろう。」(全集第 5 巻、
S. 363) なる Wladislaw 侯の言葉を見出す時、
「Witiko」の世界は das sanfte Gesetz の支配

している世界であることをはっきりと知るのである。

Stifter は、1848年の革命及びそれに続く騒然たる世相を見て、人類のより所とすべきは das sanfte Gesetz であることを、この法則に従って動いている歴史の大きな歯車と、この歯車にびったり噛み合って、共に回転しながらも回転を助けて、同じ法則に従っている小さな一つの歯車 Witiko とにおいて示そうとしたのである。

〔使用したテキスト〕

Adalbert Stifter: Gesammelte Werke, Insel-Verlag, 1959 3. Band, (Bunte Steine) 5. Band, (Witiko)

〔参照した文献〕

- Franz Hüller: Adalbert Stifters „Witiko“, Verlag Hans Carl, 1954
 Joachim Müller: Adalbert Stifter, Veb Max Niemeyer Verlag, 1956
 Emil Staiger: Adalbert Stifter als Dichter der Ehrfurcht, Verlag der Arche, 1952
 Jochann Aprent: Adalbert Stifter, Verlag Hans Carl, 1955
 Eric A. Blackall: Adalbert Stifter, Cambridge University Press, 1948
 Friedrich Seebass: Die Lebensgeschichte Adalbert Stifters in seinen Briefen, Reiner Wunderlich Verlag, 1951